

松岡 勲の読書 or 映画案内 (1)

『従軍カメラマンの戦争』『報道写真の青春時代』(石川保昌他)

写真／小柳次一、文・構成／石川保昌『従軍カメラマンの戦争』(新潮社、1993年)を読んだ。小柳次一は、旧帝国陸軍報道部嘱託として日中戦争から太平洋戦争にかけて、中国戦線からフィリピン戦線まで戦争と兵士たちを記録し続けた従軍カメラマンだ。戦後、占領軍による戦争犯罪追求を恐れた政府・軍隊は文書、写真類を焼却処分したが、この本には小柳の手で残ろうじて残された戦場の貴重な写真が収められている。

私の父は2度戦争に動員された。1度目は、1937年から北京、太原、漢口、徐州等を転戦し、徐州作戦に参加した。2度目は、1944年から南京、武漢等に従軍し、京漢作戦(大陸打通作戦)に参加した。小柳が戦争カメラマンとして記録した写真は、父が参加した徐州作戦、大陸打通作戦と重なる。この後、父は戦死した。これまで父の参加した戦争の具体的なイメージをなかなか持つことができなかったが、この本でそれをつかむことができた。たとえば「朝もやをついて行進する兵士」「麦と兵隊」「炎天下徐州に入る輜重兵と愛馬」などいずれも徐州作戦の写真だ。

本の構成をした石川の「小柳への聞き取りの素晴らしさ」が光る。その一端を引用する。「戦争の記憶を引き継ぐこと」から・

「会えるかどうかかわからないまま宮崎に出かけ、入院先に押しかけるような形で最初の聞き取りが始まったが、(中略)軍時代のことに限っては、当初、小柳の口は重かった。それまで従軍談を話しても、都合のいいところだけ使われてきたという警戒心が小柳にあったように思う。なぜ、日本が中国で戦争をしていたのかについて、当時は、それが正しいことだと小柳も兵隊も信じて中国にいたんだということを理解してくれた上での聞き取りとなるのかどうか、慎重に言葉を選びながらの応答であった。また、聞く側の筆者にも中国の土地勘がなく、年表と中国の地図、小柳のアルバムのコピーをそばに置きながらのインタビューであり、小柳にも筆者にももどかしい作業となった。」

「いま思えば、実は、そのもどかしさこそが、戦争体験を次の世代が記憶として共有することができるかどうかという問題ではなかったかと思う。」

「小柳が話の途中で考え込んだり、憶えているはずのことを『もう忘れてしまったですね』と話したとなくなったりしたのは、なぜだったのか。テープを何度も何度も聞いたたびに、小柳の戦争や軍に対する長く屈折した思いを感じる。『正しい戦争』が『正しくなかった戦争』に変わり、自分の足掛け八年の従軍期間がいったい何だったのかという思いにとりつく、恨みや涙があふれて話が止まるのである。」

この本で小柳と私の父は同世代だと気づいた。小柳は1

907(明治40)年に福岡県に生まれ、東京学芸通信社写真通信社の学芸部を経て、1937年名取洋之助の日本工房に入社。日本工房から上海派遣軍特務部に派遣され、以後、敗戦まで軍報道部の嘱託として従軍写真を撮影。

私の父・松岡徳一は1909(明治42)年大阪府に生まれ、1924(大正13)年に高等小学校卒業。卒業後は農業(小作農)と大工を兼ねていた。1937(昭和12)年に1回目の召集(陸軍工兵)、1944(昭和19)年に2回目の召集をされ、1945(昭和20)年1月に戦死した。

この本を読むまで、戦死との関連で父の没年には関心があったが、父の生年には関心がなかった。一庶民としての父の生涯がどのようなものだったか辿りたいと思った。

続けて、石川保昌他編『報道写真の青春時代～名取洋之助と仲間たち～』(講談社、1991年)を読んだ。先に読んだ『従軍カメラマンの戦争』に続いて石川保昌が関わった本だ。日本写真家協会蔵のネガから、日本の報道写真の揺籃期(青春時代)を再構成した大判のグラビア入りの本だ。ドイツから帰国した名取洋之助が指導し、日本の報道写真を作り出していった。名取をリーダー、プロデューサーとして、若き写真家(木村伊兵衛、土門拳、藤本四八、小柳次一)らは日本工房を設立し、写真雑誌「NIPPON」を創刊する。そこで形成された日本写真の「近代」は、日中戦争・太平洋戦争に深く関わった。日本の報道写真の形成は、戦争協力と決して切り離すことができない。

この本は、『報道写真』の誕生「『NIPPON』の創刊」「日中戦争始まる」「銃後の市民」「国策宣伝と報道写真」「太平洋戦争勃発」という順に構成されていて、日本の報道写真の歩みがよく分かる。また私が調べている戦中の「靖国遺児参拝」についての門奈次郎の写真も入っていて、子どもたちのその時の表情をとらえることができた。



ラストメッセージ／不死身の特攻兵・佐々木友次伍長(上松道夫)

5月7日に『ラストメッセージ／不死身の特攻兵・佐々木友次伍長』(上松道夫)の上映会があったので見た。9回の出撃命令があったのにも関わらず、そして上官に死ぬことを求められたが生き抜いた不死身の特攻兵・佐々木友次伍長について、すでに鴻上尚史著『不死身の特攻兵／軍神はなぜ特攻に反抗したか』(講談社現代新書)を読んでいたもので、この映画の上映会の企画が始まった時、とても興味を持った。映画会の前にDVDで見たが、上松監督が、入院中の佐々木友次さんを訪ね、先の本とは別に独自にこの映画を撮ったとのことだった。DVD

を見た時にすごい映画だと感心したが、上映会場で大きな画面で見るとさらにすばらしい映画だと感銘を受けた。映画のなかで佐々木伍長の上官、陸軍特別特攻隊の岩本益臣大尉の戦死後の「妻の語り」(ナレーション)の部分が、私の父の戦死と残された母の生涯と重なり、胸が熱くなった。人の命を単なる「道具」として消耗させられ、粗末に扱う「特攻」の犯罪性、どのようにして特攻が生まれ、日本の敗戦まで続けられたのかを佐々木伍長の証言を通じてよく分かった。映画の後、上松監督のお話もこの映画と今のウクライナの戦争とつながれたもので、大変よかった。